

「ヘミングウェイ効果」： 課題達成に失敗することが動機づけを高める



小山 義徳 Oyama Yoshinori

教育学部准教授

専門分野：教育心理学・認知心理学

2001年 国際基督教大学教養学部卒業

2004年 東京大学大学院教育学研究科修士課程修了

2009年 同博士課程単位取得満期退学

2012年 博士（教育学）

聖学院大学助教を経て、2013年に千葉大学に着任。

「児童生徒の問いに基づいた授業の開発」や、探究的な学習を主な研究テーマとしている。

— どのような研究内容か？

「武器よさらば」、「老人と海」等の小説で著名な文豪ヘミングウェイは「あと少いでこの文章を書き終わる」という時に、あえて書くのを止める」という書き方で小説を書きました。そうすることで、次の日に書き始める際に「早く、あの文章を書き終えたい」という気持ちが高まるからです。

ヘミングウェイのこのユニークなライティング・スタイルにヒントを得て、「課題の残りが少なくなるほど、その課題を達成したいという動機づけが高まること」を、本研究では「ヘミングウェイ効果」と名付け、以下の2つの研究で検討しました。

まず、研究1では実験参加者に新聞記事の一部を示し、原稿用紙に書き写してもらいました。そして、大部分の人がまだ写し終わらない時に「手を止めて下さい」と伝えます。つまり、多くの人は課題を達成できない状況を作り出したのです。その後で、「書き終わるまでの残りの文字数」を記入してもらった上で、「課題の残りをどれくらいやりたいか」を尋ねました。その結果、例えば、残り100文字で書き終わる人よりも「残り5文字で書き終わる」人の方が「課題を終わらせたい」という気持ちが高まりました。つまり、課題の残りが少なくなるほど、課題に取り組みたいという動機づけが高まること示されたのです（図1）。

と、ここまでは「あたりまえ」の結果ですが、次に、より教育実践に近い実験を行いました。研究2では、実験協力者を「構造化あり」と「構造化なし」の2つのグループに分け「過去の思い出について」について作文を書いてもらいました。

「構造化あり」グループには、作文の第一段落で「幼稚園から小学校までの思い出」、第二段落で「中学校から高校までの思い出」を書くように指示し（図2）、「構造化なし」グループには大まかに「小学校から高校までの思い出について書いてください」とだけ伝えました。そして、2つのグループの大部分の人がまだ書き終わらない時に「手を止めて下さい」

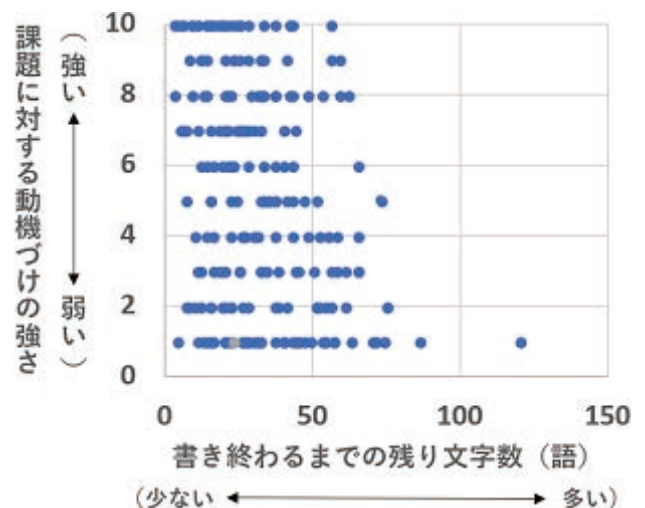


図1：研究1の結果「残りの文字数」（横軸）が少なくなるほど、「課題に対する動機づけ」（縦軸）が高くなる

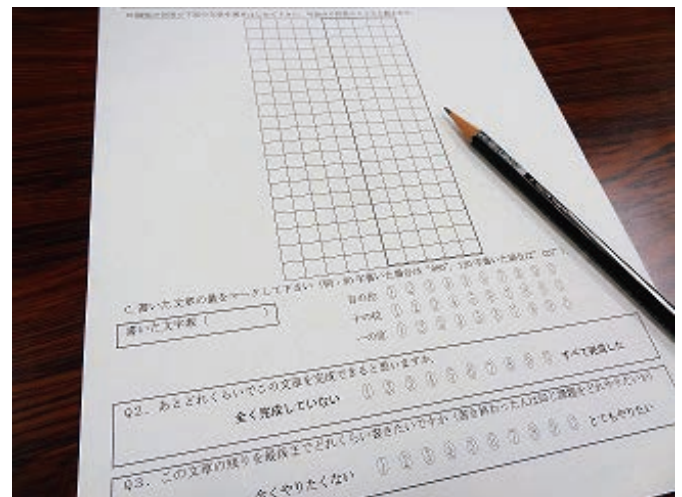


図2：研究2の課題

と伝え、研究1と同様に多くの人が課題達成に失敗する状況を作り出します。その後で、「あとどれくらいで書き終わると思うか」を記入してもらった上で、「文章の残りを最後までどれくらい書きたいか」を尋ねました。

その結果、「構造化あり」グループの方が、「課題の残りが少なくなるほど、その課題を達成したいという動機づけが強くなる」、「ヘミングウェイ効果」がより強く現れました(図3)。

この結果から、課題達成までにやるべきことが見えにくい「構造化なし」グループよりも、「課題が構造化され」書くことが明確になっている、「構造化あり」グループの方が、課題達成までに道筋がみえやすく、「あと少しで終わる」感覚が得やすかった。そのため、「課題を終えたい」という動機づけが高まったことが考えられます。つまり、「ヘミングウェイ効果」を得るためには、「課題達成までにすべき手順」が明らかになっていることが必要であると言えます。

— 何の役に立つ研究なのか？

まず、「この研究の面白さ」についてですが、一般的に「課題達成に失敗すること」は「ネガティブ」に捉えられがちだと思います。しかし、本研究では、「課題達成までにやるべきことがわかっている」場合は、課題遂行を途中で止めることが動機を高めるという「ポジティブ」な側面を示しました。「未完了の課題」は失敗であるとする「一般的な常識」とは反する知見を示した点が、この研究の面白さだと思います。

次に、「何の役に立つ研究なのか」という点ですが、「ヘミングウェイ効果」は教える際に役立ちます。例えば、学校で教師が児童生徒を教える際に、その児童生徒の能力を考慮して「あと少しで解けそうだと感じられる課題」を提示することで勉強に対する動機づけを上げることにつながります。また、博士論文等、達成に時間がかかりそうな大きな課題は、研究1、研究2、研究3と「課題を構造化」し「達成可能な小さなゴール」を、複数設定し、「やるべきことを明確化」することで、その課題に対する動機づけを高めることが考えられます。

— 今後の計画は？

作文以外の人間の日常の活動に「ヘミングウェイ効果」が影響を与えていることを明らかにしていく予定です。

— 関連ウェブサイトへのリンク URL

The Hemingway effect: How failing to finish a task can have a positive effect on motivation Thinking Skills and Creativity, Volume 30, 7-18.
▶ <https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S187118711730189X>

— 成果を客観的に示す論文や新聞等での掲載の紹介

Scientific American magazine (April 2019 issue):
▶ <https://www.scientificamerican.com/article/how-to->

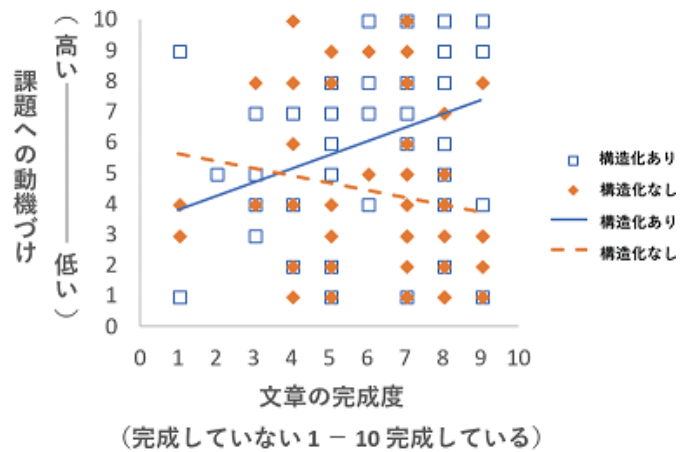


図3：研究2の結果 「構造化あり」は課題が終わりに近づく(横軸)ほど、「課題への動機づけ」(縦軸)が高くなる

turn-failure-into-success/

Kyoto University Research News (Spring 2019)
▶ http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/research_news/documents/kurn_vol6.pdf

Kyoto University news (YouTube):
▶ <https://www.youtube.com/watch?v=CNI5xqM6jlk&t=4s>

BBC WORKLIFE (December 2019):
▶ <https://www.bbc.com/worklife/article/20191205-how-to-conquer-work-paralysis-like-ernest-hemingway>

うまく失敗する方法 (日経サイエンス2019年6月号)
▶ <http://www.nikkei-science.com/?p=58751>

— この研究の「強み」は？

「ヘミングウェイ効果」は「一般化可能性が高い」点が強みだと考えています。今回は作文に限定して研究をすすめましたが、数学の問題を解く際、科学的な発見をするプロセス、コンピュータプログラムの作成や、ゲーム、スポーツにも、「あと少しでできそうだ」という感覚は、「その課題を達成したい」という動機づけと密接に結びついていると考えられます。このように、人間が日常生活で行う多くの活動に応用可能な点が、「ヘミングウェイ効果」の「強み」であると考えています。

— 研究への意気込みは？

今のところ、この研究をしているのは世界でも自分の研究チームだけです、この効果の名付け親として、このテーマをじっくり時間をかけて深めていくつもりです。将来的には1冊の本にまとめて出版したいですね。

—— 学生や若手研究者へのメッセージ

「ヘミングウェイ効果」は共同研究者との何気ない会話の中から生まれました。これからも「日常生活に潜むギモン」を大切にしていきたいです。